

は し が き

Hearn 先生は虫を好いて居られた。自然、虫に關した文章を多く物された。そのうち日本の虫に就いての記述の如き、外國人には無論のこと、日本人にも珍らしく讀まれる。そしてどの文章もその流麗な筆致は讀者を魅せずには措かぬ。

本書は先生が虫に關して物された隨筆、論文、物語、講義の總てを蒐めたものである。文の意味だけは譯文で傳へることが出来るが、文の妙趣は譯文に移しにくい。原文を熟讀玩味せられんとを讀者に希ふ。

虫に關した先生の文章の材料は主として自分が供給した。だから引用の詩歌や故事の註解には自分は自分ながら適任者だといふを憚らぬが、誤解が無いと公言は出来ぬ。誤解があれば大方諸賢の指教を仰ぐ。

文章の次序は發表の前後に依つたのでは無くて、虫の季節順にした。

Butterflies, Mosquitoes, Ants の三文は Kwaidan (1904 出版) に、Story of a Fly, Fire-flies の二文は Kottō (1902) に、Dragon-flies は A Japanese Miscellany (1901) に、Semi は Shadowings (1900) に、Insect-Musicians は Exotics and Retrospectives (1899) に、Kusa-hibari は Kottō に、Some Poems about Insects は、自分等が提供した筆記を Columbia University の教授 J. Erskine が校訂されて出版になつた Interpretations of Literature (1915) に、載つて居るものである。

前述の如く、本書を成して居る文章は總て虫に關したものであり、そして先生は俳句を充分に理解して居られたとであるから、はしがきを終るに當り、先生文題の虫を季の、先生追懷の拙句十章を茲に序ながら地下の先生の靈に捧げるのは不適當ではあるまい。

久しく上京せざれば御墓の様はたゞ
想像する許りなり

(蝶) 秋も蝶のこの墓花の絶えざるに

大學を出で、より二十餘年碌々として成す無きを愧づ

(蟻) いそしめと諭されしと蟻見ては

先生が生前好んで散策を試みられし
雑司ヶ谷あたり舊時の觀をさめざるを思うて

(螢) 螢とぶ畑道なりし家續く

閉靜なる古寺の境内を逍遙するなど
先生の好み給ひしところなるを懷ひて

(蚊) 珍しき墓と見て立つ蚊の夕べ

寒さを恐れられし先生は冬時書齋硝子障子の西日受けて暖きを愛し給ひき

(蠅) 蠅とべり日南窓櫻返り咲く

蜻蛉の文に余が句をも收め給ひしに

(蜻蛉) 蜻蛉の句秋の田描いて贅とせん

松江なる先生の舊居は改造されしが、先生を偲びて來觀する内外人多きに願み、特に再び舊觀に復せし家主たる余が友人、さる夏訪ねし折一句を求めたれば

(蟬) 家も庭も在りしが儘に啼く蟬も

本年九月二十六日は先生の十七回忌に相當したるに未亡人へ

(虫) 十七年今年も虫の秋となり
虫好かれし懐ふ庭なる虫きけば
奉る虫の句句案夜半の秋

大正九年十一月

繞石 大谷正信